

川崎益太郎 選

特選

麦の秋麵類増える米不足

福山暁の星小学校五年 加藤 凜郁

【評】令和の米騒動と言われる社会現象を、「麦の秋」という季語を使い、巧みに表現した、心憎い句である。

雨と傘永遠に仲良くできぬ

庄原市立比和中学校二年 垣内 優希

【評】雨と傘、付き物なのに仲良くできない関係という捉え方に感心した。裏で、喧嘩ばかりしている両親も、本当は愛し合っていると信じたいという子どもらしい願望も読める句である。

あああああああああああ暑すぎる

広島市立己斐小学校六年 吉田 篤史

【評】〈あ〉だけで、十二音使った斬新な句。季語も〈あ〉で韻を踏んだ、俳諧味溢れる句に仕上げた技量に脱帽の句。

ハンカチを渡した君は勝ち笑顔

呉市立呉高等学校三年 岩畔 奈津

【評】ハンカチを差し出した貴方は、勝ち組の顔をしているという句だが、スポーツ、恋愛等、読みが広がる一句である。

あじさいがぱつと笑った気がしたよ

廿日市市立佐方小学校五年 堀江 楓乃

【評】あじさいが咲いているのを見て、笑ったように感じたという句である。作者の明るい感性に感心した。

あせくだるはだの迷路をわたりゆく

廿日市市立佐方小学校六年 菅 湊音

あの日見た向日葵まるで笑う君

呉市立呉高等学校二年 井上 真緒

初桜新たな扉切り開く

福山市立幸千中学校三年 高橋 慶志

さくらんぼ二人の秘密恋心

呉市立川尻中学校三年 福井 蓮紀

受験期に進まぬ課題手にスマホ

呉市立呉高等学校三年 中村 美友

夏休み机とデートは最終日

庄原市立東小学校四年 大久保 朔

カブト虫いつか死んじゃうかなしいよ

廿日市市立佐方小学校四年 岩本 泰貴

賑わいと哀愁ただよう蝉時雨

県立三原高等学校一年 藤野 心愛

桜舞う別れと出会い始まりだ

府中町立府中小学校五年 利元 晴皇

散る花火見ている君に恋をする

県立三原高等学校一年 山中 大成

青蛙雨粒飾りいきいきと

県立尾道北高等学校一年 中川紗百合

うろこ雲悔しさ滲む弓の影

県立広島皆実高等学校二年 吉川 咲希

なやむよね葉っぱ食べるか桜餅

福山市立誠之中学校三年 佐野 光咲

亡き祖父がまぶたに浮かぶところてん

庄原市立庄原中学校三年 近藤 美緒

父の日に花束ではなくお酒をね

府中町立府中小学校六年 鳥井菜々花

本心を打ち明けられず夏終る

広島市立船越中学校三年 大谷 宙夢

母嘆くあまりの暑さ電気代

比治山女子中学校二年 西本 桃杏

うつくしきもみじかつ散る銀閣寺

広島国際学院中学校三年 日谷 咲希

ヒガンバナあなたに届けこの思い

福山市立幸千中学校三年 藤井 駿

蟻地獄逃がられないクレーター

県立三原高等学校一年 谷川 奏太

川崎益太郎 選

特選

冬めくや駄菓子のごとく菓受く

広島市 永宗 啓司

【評】毎日同じ菓を飲んでいると、貴重な菓も、駄菓子のようだと、まさに俳諧味あふれる句で、言われて納得の句である。

動物も日傘で歩く日も近い

広島市 井上 与作

【評】異常な暑さが続き、男の日傘も珍しくなくなった。愛犬に日傘を着ける人も出てくるに違いない。大胆な予言の句。

来るや来る度し難きもの八月来

広島市 下末かよ子

【評】八月は毎年来るが、八月に対する思いは、人それぞれで、どのよう
に迎え、どう行動するか悩ましい。真面目な句。

夜と霧時を経てなほ晴れぬ朝

広島市 篠田 榮子

【評】有名な「夜と霧」の小説を踏まえて、先の見えない世の中を憂いた句。小説の題名を季語として使った巧みな句。

籐寝椅子家風家訓のなきくらし

安芸郡府中町 大久保信子

【評】籐寝椅子は、自由きままな休息椅子である。家風家訓とは無縁である。俳諧味あふれる句となった。

入 選

唐突に孫よりもらふお年玉

府中市 大石 一江

傘干して私を干して梅雨晴間

広島市 羽城 裕子

薔薇の束黙つておいて行きし吾子

広島市 国本 和子

老いの身を奮ひ立たせる暑さかな

東広島市 山田美佐子

節分に産声高く鬼逃げる

三原市 石口 晃択

老いてなほ俳句指折り紅芙蓉

福山市 名取美佐子

浦島ぢゃと擲揄され久し帰省の子

呉市 藤本 卓水

摘まれたい摘まれたくない水中花

広島市 橘 しのぶ

全集も二束三文秋の暮

広島市 松尾 信彦

朝顔は夕日照らして口閉じる

福山市 酒井日出夫

孫談議そつと離れて菜虫とる

東広島市 宮田 勲

遠花火区切りいづくぞ余生とは

府中市 山口 道子

今を生く母の青春終戦忌

福山市 檜崎喜美枝

初秋や高齢者宛封書の来

山県郡安芸太田町 河野由美子

特攻の達筆の遺書敗戦忌

広島市 池田 萩邨

反抗は向上心よ青嵐

広島市 村本クニ子

少年の決意むくむく雲の峰

三次市 渡里トモ枝

秋灯を数え故郷の過疎を知る

三次市 林 敏明

死の床に鳴いて寄り添ふ秋の蟬

廿日市市 廣田 厚子

さくらんぼえくぼのような顔をよせ

安芸郡府中町 南口 勝